

かんで処置した記憶がある。当日全員入浴。浴場そのものを温め「おけ」はなし。木の箱の湯一杯それで洗う。被服を消毒すること。皮類はだめと。サアそれからが大変。床屋どのひげ剃り。脇の下、いや全くたまげた。たまげた。たまげたついでにあと一つ、「シラミ全滅」。競って流言飛語が飛んだ、日本の男を「去勢」すると。いよいよそのときがきたか。私自身深刻に考えた。しかし、杞憂に過ぎなかった。今でもそんなことが昨日のように悪夢のように思い出される。

私の俘虜記

福岡県 藤吉 静男

昭和二十年二月、黒河第七国境守備隊八四部隊より歩二七四連隊に改編。四月、三中隊のみ隣部隊法別拉十三国守五六部隊南進後の警備につく。

黒龍江岸山上の臨江山監視哨近くのトーチカの重機関銃座より対岸のソ連領を眺め、満州の一番北の端に北か

ら、これ以上北に行くことはあるまいと思ったのに。

七月、独混一三五旅団。独歩七九八大隊三中隊に改編。八月八日、日ソ開戦、九日嫩江集結のため、法別拉転進。二十一日、嫩江着。二十二日、ソ連軍侵攻、武装解除され、作業第三大隊千五十人に編成される。

東京ダモイと言いながら、冬服防寒装具一式携行をソ連軍より命ぜられ、九月十三日、嫩江出発。二十六日、黒河より入ソ。ウラジオから日本に帰してくれるものと半信半疑ながら信じていたのに、十月一日朝、ブラゴエの駅よりアムール鉄道の貨車に乗せられた。

翌朝はクイブシェフからシベリア鉄道を東に進行していなければならないのに、十時になって、お昼過ぎても、依然太陽は後ろにあり、線路の加減で西向いているのでは、もうそろそろ東に向かうのでは、の願ひ空しく、列車は西へ西へと進行し続け、次第に帰心を断たれ、物言う元気もなくなり、あれほど帰国後の話に燃え盛っていたのに、車内は不安とあきらめで火の消えたように静寂になっていった。

列車は三日午後、とある駅に停車、全員おろされ、初

めてそこで二、三か月作業して東京ダモイと宣言。まあ、それくらいなら日本に帰してくれる旅費代ぐらい働かねばとあきらめ、ここツイクダ、チタ地区第六収容所第二分所に収容。約三百人はタニエルストックに連行される。

地獄の始まりとは露知らず、スコローダモイ、クリスマスには正月、春先、夏、秋にはと次々に言い続け欺かれ、飢餓と劣悪な環境の過酷な強制労働に、二十二年六月十日に出るまで抑留される。

作業内容は、山でカラ松、赤松、シラカバを伐採、製材所へ運搬、枕木に製材、貨車積み込みの一貫作業。満員にいた間は主食白米の給与が、入ソと同時に精白コウリヤンにかわり、間もなく原穀のまま、煮炊きして上がるようになる。胃腸の弱い人は受けつけず、下痢、血便、栄養失調で十一日から死亡し始め、虚弱者、急性肺炎等で半年の間ラーゲルだけでも三十五人、後の入院死亡まで合わせると七十人の多きに達した。

健康な者で、食物が少なく、朝食、バレイシヨから甘らん数切れ、羊肉一切れ入っていれば幸運なスープ。と

いっても塩汁。八十グラムの黒パン、かゆに近いコウリヤン軽コップ一杯、昼食はコップ一杯半のコウリヤン。夕食は朝に同じで、朝食一ぺんに食べ、夜まで我慢する人、作業場で飯ごう一杯かゆにて食する人。もっともかゆを長く続けると、体が作業できぬほどむくんできた。

とかく、冬、空腹に耐え、零下四十五度前後に極寒の中で過酷な伐採。ノルマ三人一組で六立米、大変なものだった。運搬は馬そりとトラック積み込み、その夜間作業のつらさ、直径二メートルくらい、大たき火であたれど、前は焦熱なれど後ろは酷寒にさいなまれ、一晚中きりきり舞い。作業と両方で疲れ果てたものだった。

製材所の使役は全員が機械に振り回され、ひどい毎日だった。夏は夏で山野ではアブ、ブヨ、蚊の大群に顔が変形するほど刺され、舎内は昼はハエの大群、夜は南京虫、ノミに責められ、悩まされ、眠ることできず、泣き面にハチ。

でも食物は山野の雑草、キノコ、何でも食べられ、ただ、タンポポはにがく、いただけなかった。ワラビはゆ

でたらとけてしまう感じ。動物は犬、猫、蛇は大に馳走
ネズミ、カエル、昆虫、何でも胃袋を満たしてくれ、特
に赤松にいる幼虫は大変美味だった。

調味料は駅の構内使役のとき、貨車の床裏に岩塩汁が
流出、乾いたやつ、もっとも牛馬の小便も石灰の粉もま
じった大変なしろものをはぎ取ってきて、味つけしてい
た。

貨車積み作業はほとんど日常作業の終わったころ、貨
車が四、五十両はいり、主に夜間積み込みが始まり、十
二時過ぎる真夜中までかかり、しかも週二、三回と、難
行苦行の一つで、かなり体力消耗の作業だった。

もう一つ、スタハートノフの日とかで、日曜日、平日の
ごとく作業に狩り出され、理由が増産なのか、ノルマ不
足のためかよくわからぬまま。六日間、栄養失調の体を
引きずり、作業を続け、口曜に休養がとれるささやかな
喜びも吹っ飛び、しかも一か月二、三回あり、ひどいと
きは一か月も続き、休養がとれなくて、塗炭の苦しみを
なめさせられたものだった。

いつのころか定かでないが、私どもの体に等級がつけ

られ、その方法は、赤軍の女医が胸の肉をつまみ、復元
力の強い者、体に異常があっても肥満型の人は早くもど
り一級、やや遅い者二級、健康でもやせていて遅い者三
級、しまいにはみな衰弱し、やせてくると、尻の皮を
引っ張って決められるようになった。その次が四級で、
入院下番等、作業できない人は作業免除された。そのほ
か、体の調子悪く、作業できない者は、毎朝作業に出る
前、医務室で診断を受けたが、一日の練兵休は四十人が
限度、それ以上はどんなに悪くともだめ、腹痛、風邪、
いかなる病気でも、熱が三十八度以上なければ休めず、
もっともいろいろ工夫して熱を出していたようだった。

一番ひどくかわいそうなのは、やせてなくて足腰の神
経痛、関節炎の人は、いかに悪くとも認めてもらえず、
苦しみにあえていた。

一級は村のソ連人並の重労働。ノルマ高く、真面目に
一生懸命頑張っても八〇%がやっと。従って食事も定量
の八〇%、やっと生きて作業ができる程度。六〇%以下
パンなし。三〇%以下は見せしめのためか食事なく、重
営倉入り。二級は一級の八〇%が一〇〇%。三級は六〇

%で一〇〇%。

ちなみに三級が一級の八〇%すれば一二五%以上の食事がもらえた。全く無茶苦茶な使い方だった。私も体の強い方でなく、すでに血たんを出していて、あと一年もいたらシベリアの土に化していただろう。

わずか二百三十八人、前述の日、ラーゲルを出、沿線各地で合流し、千五百人ナホトカに着く。しかし露語のアルファベット順に五個中隊に分けられ、その日から選別が始まり、四中隊五十人を残し作業要員九百人が終わり、再度奥地に護送された。

幸いにもえり残り、病弱者、老人六百人の中に、浜の幕舎から第一収容所入り、すさまじい最後の洗脳教育、人民裁判をなんとか克服し、帰還船に乗船。でも船はいつ回れ右するかわからぬと、皆戦々恐々、二十八日、舞鶴上陸、初めて喜びがわく。夢ではとおをつねりうれしさの实感を味わった。

三十日復員、二十六日目に父親の死にあい、家族五人を養うため、会社をやめ、自営業二十二年、苦勞の甲斐なく倒産、また勤めに戻り健闘の結果、ささやかながら

安住の日々を迎えている。

シベリア抑留記

新潟県 高橋 義夫

終戦後満州のうちをあちこち移動させられ約一か月、着いたところは黒河というところであった。

目の前に黒龍江の流れを見て、こんどは船で日本に帰るのだというデマが飛んだ。そこで大きな船に三日間もいろいろな荷物を積み込んで、最後に人員が残らず乗り込んで出発した。

どの方向に行くのかと思っっているうちに、すぐ対岸の港に横づけとなり、今度は積んだ荷物を全部おろせという。みながっかり、とうとうソ連の地に連れてこられたという実感がわき起こってきた。そこから約四キロ離れた貨物列車のところまで、その荷物を運搬させられた。数日かかって荷物を運び終わるとみなその貨車に乗せられ、三日間走っておろされたところはチタであった。そ